

# UAEにおける価値観形成とグローバル発信の取り組み –アブダビを事例として–

ウエルズ 桜 立命館大学大学院国際関係研究科 博士後期課程

本稿では、2025年1月末から2月上旬までアラブ首長国連邦（以下 UAE）のアブダビで行ったフィールドワークについて報告する<sup>1</sup>。

UAEは建国から半世紀余りとその歴史が比較的短いと同時に、総人口の約9割を外国人が占める特徴的な社会構造を有する。こうした状況を背景に、これまで多様な文化・教育政策が展開されてきた。これらの政策は、アラブ君主制国家としての理念や国教であるイスラーム教を尊重しながら、欧米由来の手法やコンサルティング機関の知見を取り入れ、両者の調和を模索する形で進められている。今回のフィールドワークは、海外機関との連携が活発なアブダビの文化・宗教施設を対象に、今日のUAEにおける価値観形成の動向について探ることを目的としたものだった。特に、UAEの基本理念や国家像を確認するとともに、海外機関との連携を通じた価値観形成が具体的にどのような方向性を持ち、どのように実践されているのかについて把握することを目指した。

まず目立った点は、訪問した施設の多くでUAE指導者層の功績を称賛し、その正当性を強く打ち出す傾向が見られたことである。たとえばアブダビ文化財団（Cultural Foundation）内に位置する子ども図書館（Abu Dhabi Children's Library）では、UAE史関連書籍のほとんどが建国の父といわれるザイド・ビン・スルターン・アール・ナヒヤーン（Zayed bin Sultan Al Nahyan, 1918-2004）に関する絵本や児童書だった。他の施設でも、ザイドをはじめとしたUAE指導者層を讃える傾向が顕著に見られた。『アラブ首長国連邦歴史百科事典 *Encyclopedia of UAE History*』の編纂事業を推し進める国立図書館・公文書館（National Library and Archives）には、指導者層を讃える博物館が併設されていた。シェイク・ザイド・グランド・モスク（Sheikh Zayed Grand Mosque: 以下グランド・モスク）や大統領官邸（Qasr Al Watan）といった主要な観光施設に設置されていた解説パネルも、施設の理念とザイドとの関わりを強調する説明から始まっていた（写真1）。

特に大統領官邸では、『アテナイの学堂』を背景に設置されたテレビから、「指導者とはいかなる存在か」をテーマとした動画が終日放映されていた（写真2）。この約3分半の動画は、アラビア語版と英語版が交互で流れ、いずれも「優れた指導者の条件とは何か」という問いかけから始まる<sup>2</sup>。イブン・ハルドゥーンやセネカといった、世界的に知られる歴史上の人物を引き合いに出しながら、まずザイドの卓越した指導者としての資質を確認し、その遺産としての現UAE指導者層を讃える内容となっている。上述した施設に限らず、筆者が街で立ち寄った書店や土産物店でも、UAE指導者層の伝記や偉業に関する書籍が多数陳列されていた。

UAEがグローバルな「交流」の中心地として自ら



写真1:グランド・モスク内にあるザイド・ビン・スルターン・アール・ナヒヤーンの廟。廟の中では、複数人のウラマーが24時間交代制でクルアーンを読誦している。多くの人々がザイドに敬意を表すため訪れるという。（筆者撮影）

の価値を強調している様子も明確に見て取れた。たとえば2017年に開館したルーヴル・アブダビ美術館 (Louvre Abu Dhabi) の展示は、既存の地理的・歴史的枠組みを超えた世界史的視点をコンセプトの一つとしている。そのため、展示には多様な文化交流を強調する傾向が見られた。同美術館の学芸員たちの論文や UAE 高官による序文を収めた『世界が混交する美術館 *Worlds in a Museum*』(2020年)には、「単なる歴史理解だけでなく、世界における自身の位置づけや立場を認識し、様々な情報に通じた文化的な世界市民 (global citizens) となる次世代の育成を支援する」という理念が明確に記されている<sup>3</sup>。加えて、常設展示の入り口を飾る Grand Vestibule では、「ルーヴル・アブダビのプロジェクトの核心にある最も重要なテーマ」として「人類全体に通じる[文化的営みの]普遍性」が掲げられている<sup>4</sup>。常設展示は以下の通りである；0 Galleries Entrance, Grand Vestibule, 1 The First Villages, 2 The First Great Powers, 3 Civilisations and Empires, 4 Universal Religions, 5 Silk Roads, 6 Lords, Kings, and Caliphs, [6.5] Cosmography, 7 First Globalisation, 8 World Empires, 9 Towards a Modern World, 10 Questioning Modernities, 11 A Global Stage, 12 Memory of Signs<sup>5</sup>。

さらに、UAE が多様な宗教、文化、価値観の架け橋となるグローバルハブ (global hub) としての役割を担い、国際社会における対話と相互理解を推進する中心地としてのアイデンティティを打ち出そうとしていることも明瞭であった。例として、UAE を象徴するモスクとして名高いグランド・モスクや、アブラハムの宗教 (イスラーム教、キリスト教、ユダヤ教) の礼拝所が並び立つ複合宗教施設であるアブラハミック・ファミリー・ハウス (Abrahamic Family House：以下 AFH) が挙げられる。上記2つの施設では、特に「共生」や「多様性」、そして「寛容」や「対話」といった理念を強調する傾向が見られた。グランド・モスクは、その建築自体がこれらの価値観を象徴し、寛容と多様性の精神を体現しているとされる (写真3)。デザインや建設には、UAE のみならず世界中の職人や素材が用いられており、この融合によって「世界をつ

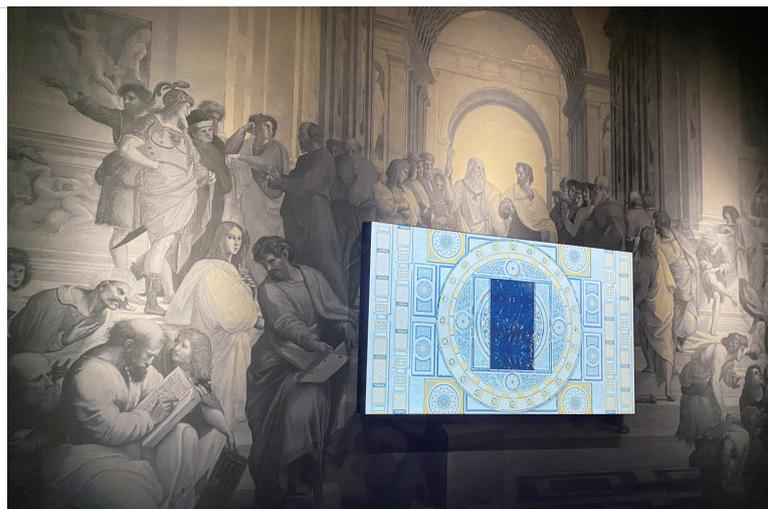


写真2：大統領官邸「知識の館」内の展示。(筆者撮影)

なく」建造物としての意義を持つという<sup>6</sup>。公式サイトによれば、グランド・モスクは「建国の父 [ザイド] の先見的な構想を具現化したもの」である<sup>7</sup>。その構想とは、グランド・モスクが「UAE 社会に深く根付きつつ、先駆的な宗教・文化施設としての役割を果たし、国際的な訪問地となり、多様な文化が交差し響き合う場を提供し、寛容と文化間対話を促進する場となること」である<sup>8</sup>。同サイトはさらに、グランド・モスクが世界的な観光名所として確固たる地位を築いたことこそが、この理念の実践と現在の指導者への継承を証明するものだと述べている。

グランド・モスクでは、「共生」「多様性」「寛容」「対話」といった理念を、特に建築を通じて具現化しようとする意図が強調されていた。一方、複合宗教施設の AFH では、施設の利用者や訪問者との人的交流を通じてこれらの理念を実践しようとする姿勢が見受けられた。そのためか、AFH 開設に関する展示は充実しているものの、個々の宗教について詳しく知るための展示は多くない。各宗教に関する専門的知識を深めたい場合や、AFH の視点からの宗教解釈を学びたい場合には、物足りなさを感じる可能性がある<sup>9</sup>。AFH の特徴は、人々がオープンに交流できる場を提供している点にある。同施設では、多くの UAE 市民と在住外国人によって構成される現地コミュニティの活動が活発であり、参加者同士の交流やイベントが頻繁に開催されている。そのため、施設内で人々との対話を試みたり、イベントに参加したりすることで、関心のある



写真3：シェイク・ザイド・グランド・モスク（筆者撮影）

テーマについて活発な議論に触れることができる。たとえば筆者は、AFH 主催の座談会に参加させていただいた。AFH では月に一度のペースで座談会が開催されており、希望すれば外部の来館者でも参加できる。この座談会では幅広いテーマが扱われるが、基本的に在住者向けの内容が多いため、現地に暮らす人々の視点から UAE の現状や課題、将来の展望などについて理解を深めることができる。筆者が参加した際には終始アットホームな雰囲気が漂い、初めての参加にも関わらず、自然と議論の輪に入れていただいた（写真4）。

今回のフィールドワークを通じて、主に UAE の文化・宗教施設における理念の主張や歴史叙述のあり方から、UAE がどのように自国のアイデンティティを形成し、世界に向けて発信しているのかを読み解くことができた。一方で、UAE の価値観形成に貢献すると思われる国定教科書の閲覧・入手は実現しなかった。現地で面会した識者によれば、検閲が厳しく、国定教科書を自由に閲覧・購入できる環境が整っていない可能性があるとのことだった。今後の研究を遂行するにあたって、教科書を閲覧ないしは入手できる経路や方法などを明らかにしていきたい。

最後に、今回訪れたいくつかの図書館について記しておきたい。① 国立図書館・公文書館：国立図書館は「国立図書館・公文書館」が入る建物の2階に位置する小規模な図書館である。館内の書棚に並ぶ

本の数は多くないが、司書の方に頼めば関心のある分野の書籍をいくつか選んで持ってきてもらえる。書籍や公文書のデジタル化が進んでいるため、公式サイトを活用することで必要な資料を効率的に探せる。② 大統領官邸付属図書館（Qasr Al Watan Library）：5万冊の蔵書を持つこの図書館は、外国からの訪問者を含め、誰でも利用可能である。ただし、図書館利用者用の入り口と官邸訪問者用の入り口が異なるため、入館時には注意が必要だ。利用する際は、ビジター・センター到着時に図書館利用の旨を申し出る必要がある。官邸訪問者は専用バスで官邸入り口まで移動するが、図書館利用者は別の入り口へ案内される。③ アル＝ジャーミィ図書館（Al Jami' Library）。グランド・モスクの付属図書館で、モスク見学後に立ち寄ることができる。蔵書は、イスラーム関連諸学や UAE 関係の書籍、定期刊行物、貴重書、児童書など幅広い。館内ツアーがあるため、初めての訪問でもスムーズに利用できる。なお、UAE では多くの施設が金・土曜日に休館するのに対し、この図書館は土・日曜日が休



写真4：アブラハミック・ファミリー・ハウス主催の座談会の様子（筆者撮影）

館日なので注意が必要である。④ アブダビ子ども図書館：図書館全体の特徴として、アラビア語書籍と英語書籍が区別なく混在して配置されている点が挙げられる。施設の職員や訪問していた家族もアラビア語と英語を自在に切り替えながら会話をしており、英語教育を重視してきた UAE の成果が明確に表れていた。本図書館の蔵書はすべて児童書であり、訪問者の多

くは子ども連れの家族である。そのため、大人だけで入館すると警備員や職員の方々に不思議そうな目で見られることがある。特に問題視されることはないが、必要に応じて訪問目的を説明するとよいだろう。

## 謝辞

本調査にご協力いただいた皆様に感謝いたします。特に、日本エネルギー経済研究所の掘抜功二博士からは UAE に関する専門的な知見を賜り、Anwar Gargash Diplomatic Academy の Tingyi Wang 博士からは UAE における文化・教育政策の現状と課題について貴重なご教示をいただきました。また、本調査は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2101 の支援を受けて行いました。ありがとうございました。

[1] 本稿では、今回の調査で訪れた各施設の正式な英語表記を記載する。記載する施設のうち、大統領官邸 (Qasr Al Watan) やアル=ジャーミ図書館 (Al Jami' Library) はアラビア文字の転写に基づく名称だが、これらも公式サイトで提示されている正式な英語表記であることを付言しておきたい。なお、人物名についても政府公式サイトでの正式な英語表記を採用し、日本の学術界で一般に用いられているアラビア文字の転写規則には従っていない。

[2] Qasr Al Watan 「知識の館 The House Of Knowledge」内展示 2025 年 1 月 31 日視聴。

[3] Mohamed Al Mubarak, "Forward: It Always Seems Impossible Until It Is Done," in *Worlds in a Museum: Exploring Contemporary Museology*, eds. Louvre Abu Dhabi and École de Louvre (Leuven University Press and Louvre Abu Dhabi and École de Louvre, 2020), p. 12.

[4] Permanent Galleries, "Introduction: Grand Vestibule," in Louvre Abu Dhabi App (Audio Guide), Accessed January 29, 2025. <https://www.louvreabudhabi.ae/en/explore/louvre-abu-dhabi-app>

[5] 既述のように、ルーヴル・アブダビ美術館の展示は世界史的視点をコンセプトの一つとしている。そのため、展示には文化や文明の複数性、およびその相互交流を強調する傾向が見られる。このこだわりは、各展示名が複数形で表記されている点

にも表れている。展示名に込められた意図やニュアンスを正確に伝えるため、本稿では展示の名称を英語表記のままとする。

[6] Sheikh Zayed Grand Mosque Centre, "The Mosque and The Founder," Accessed February 2, 2025. <https://www.szgmc.gov.ae/en/about/the-mosque-and-the-founder>

[7] 同上

[8] 同上

[9] イスラーム教、キリスト教、ユダヤ教の礼拝施設以外の主要な展示として、『礎石 *Foundation Stone*』と題した石板が挙げられる。この石板には、2019 年の「寛容の年」を記念し、以下 4 人の直筆署名が刻まれている；当時のアブダビ皇太子だったムハンマド・ビン・ザーイド・アール・ナヒヤーン (Mohammed bin Zayed Al Nahyan)、UAE 副大統領兼首相のムハンマド・ビン・ラーシド・アール・マクトゥーム (Mohammed bin Rashid Al Maktoum)、第 266 代教皇フランシスコ (Pope Francis)、そしてアズハル機構のグラント・イマームであるアフマド・タイプ (Ahmed El-Tayeb) である。また、その隣には、同年にアブダビで署名された『人類の友愛に関する文書 *Document on Human Fraternity*』の写真と解説が展示されている。

## 【著者プロフィール】

ウエルズ 桜 (うえるず・さくら)



立命館大学大学院 国際関係研究科  
博士後期課程 / RARA 学生フェロー  
専門：比較政治思想史、旅行記研究  
主な業績：『『黄金の精錬』にみる

正義と文明の関係性：鑑文学としての観点から』『政治思想研究』24、2024 年、250-281 頁。「リファア・アル=タフターウィーの政治思想：正義の追究における個人の位置づけ』『政治学研究』65、2021 年、93-123 頁。「リファア・タフターウィーの西洋思想観』『政治学研究』62、2020 年、1-21 頁。